

「昭和 23 年の学制改革に遭遇した世代の『思い出の記』(その 10)」

《 相馬中学校に入学し相馬高校卒業となる等 》

母 校 を 愛 す <sup>(※1)</sup>高普4回卒 長 堀 守 弘 <sup>(※2)</sup>

今年の4月、明治大学の理事長に就任しましたので、中学、高校の附属それぞれ3校ずつ入学式の式辞を述べました。高校生はともかく、中学生は、本当に緊張して、祝辞を贈っている小生にも、ひたひたと空気が伝わってきて、思わず、はっとする胸の思いが、こみ上げてくるような体験をさせて頂いて、ああ！人生の老若はこれなのだと思います。

振り返って自分のことに照応してみれば、昭和21年4月、県立相馬中学校の入学式に、当時の宮本行二校長はどんな式辞を話されたのだろうか、記憶が奥深く隠れてしまって思い出せないのです。その後、甲、乙、丙、丁組にクラス分けされ、小生は丁組でクラス委員になったことを覚えています。

予科練帰りの5年生の大人っぽくみえたこと、汽車通学で「OFF LIMITED」のデコイチに乗っていたこと、騒然とした大戦後の社会で、みんな一生懸命に生きていたこと、懐旧の思い出の中では美化されていくが、そんな生易しいものでもなかったと思います。

「田子の浦ゆ 打ち出でてみれば真白にぞ 富士の高嶺に雪は降りける」(山部赤人)  
故岩崎敏夫 <sup>(※3)</sup> 先生の国語最初の授業はこのようにして始まりました。私、12才の春でした。

それから50年。この間、浜名忠雄 <sup>(※4)</sup> 相馬市長の助言で磯部柚木にソマ株式会社の工場進出をしました。昭和49年のことでした。ドイツ製の精密機械の操作に苦勞したことを記憶しています。

平成7年のころ、百周年記念事業が本格的に始動して、私は「相中・相高百年史」の編纂部会長に推挙され、同時に副会長となり、責任の重さを実感しました。

当時の勝間田敏男校長始め、故神山文男 <sup>(※5)</sup> 実行委員長のもとで、一人一人の名前を挙げたいほど母校愛に燃えた多くの先輩先生の熱意で、素晴らしい百年史になりました。

私たちは戦後の制度改革の真只中に中学・高校と6年間、ただ一度の人生の多感な、そしてかけがえのない時代を母校とともに時間を刻したことは生涯決して忘れることのできない宝物であると誇りに思うのです。母校の更なる発展と馬城会会員、関係する地域の方々の弥栄を心よりお祈りする次第です。

(※1) 創立110周年記念誌『紅の旗』(2009(平成21)年1月発行)の「思い出の記」より。

(※2) 旧姓斎藤。昭和27(1952)年卒、新地出身。(株)ナガホリ会長。

(※3) 昭和2(1927)年卒、相中第25回、中村出身。

(※4) 昭和3(1928)年卒、相中第26回、飯豊出身。

(※5) 昭和14(1939)年卒、相中第37回、中村出身。第8代馬城会長。

## 記 念 講 演 (※1)

### 『夢と希望－高校生から次のステップへ』(※2)

相馬高校普通科第4回卒 長 堀 守 弘 氏

明治大学理事長

株式会社ナガホリ代表取締役会長

ただいまご紹介を頂戴いたしました長堀です。私は、そんなに有名人でもなければ偉い人間でもございません。ただ、旧制相馬中学校の最後の入学生です。学制改革と共に、これも一つの縁だと思うのですが、相馬中学校、そして相馬高等学校に6年間お世話になりました。この相中、相高6年間が私の人生を良い意味でも悪い意味でも決定づけたと思うわけであります。本日は日下部校長先生、そして先ほど大変素晴らしい挨拶をされた青田知恵生徒会長さん、さらに「お前が講師として喋れ。」とご指名を頂いた実行委員長の寺島泰三<sup>(※3)</sup>さん、大変ありがとうございました。

そして本日、創立110周年並びに校歌制定100年という記念すべき日にお話をするということは名誉なことではないかと思えます。生徒諸君は大変長い時間が経過しておりまして、疲れているかな？そんなことないよね、若いから。1時間くらいなので、よく聞いていただければありがたいと思えます。私はお話をする先生ではございませんので、そんなにお話の仕方はあまり上手ではございませんので、ときどき失言をするかもしれませんが、麻生太郎さんほど一言多いということは、たぶんないと思えます。テーマは、「夢と希望、高校生から次のステップへ」ということで設けましたのは、私も実はそういうことを経験して、あの頃はこういうことだったんだな、ということを感じ取って、そしてそういう時間の中で生きてきたということがあるものですから、こういうテーマにさせていただいたわけであります。

実は私は高校時代に大活躍したわけでもなんでもありません。本当に普通の卒業生ではなかったかと思うのですが、その高校生の頃から意識していたことは、時間をどういう風に使えばいいのかということでした。暇で暇で、暇を持て余して、時間というものが止まっているような時もありましたし、逆に時間がどんどん過ぎていく、そういうスピードのある時間と自分が向かい合って、どういう暮らし方をしてきたのか、ということも含めて考えてみますと、ちょうど中学3年の時に50周年記念がありましたから、その時から数えてみますと、もう60年経っているわけです。50周年の時に何があったのかな、ということを考えてみても、なかなか思い出せないのですね。

むしろ思い出すのは日常の生活です。汽車通学をしておりますが、昭和21年であります、第二次世界大戦に日本が負けてすぐでありますので、学校に来るときはまあまあ仙台発ですから、そんなに遅れることはなかったのですが、学校の帰途ですね、帰る時間帯、2時3時4時頃、だいたい毎日のように列車は遅れます。2時間3時間、あるいは4時間くらい汽車が遅れるのですね。私は新地から通学しておりましたので、駅に行つて、何時間遅れ、ということが書いてあると、友達と一緒に線路上を、2時間ちょっとくらいかけて、新地まで10キロくらいあると思うのですが、歩いて帰った、ということもたくさん経験しておりました。

また、当時は予科練帰りですね、中学1年生から見ると大人びた上級生のお兄さんたちがおりました。マントを着ておまして、その予科練帰りの先輩方はずいぶん愛情のある喝を入れられたような記憶があります。暴力は経験したことがありません。・・・

私が特に生徒諸君に申し上げたいことは、私は日本人でありなおかつ相馬でお世話になった人間ではあるわけですが、仕事柄、多くの世界の人たちと付き合いってきました。何といても一番多く付き合いきた人たちというのはユダヤ人です。このユダヤ人の人たちは世界中どこへ行ってもおられるわけですが、私が1972年、それは昭和47年ではありますが、日本人で初めてベルギーのアントワープダイヤモンド取引、大変伝統のある、伝統と格式のある難関のダイヤモンド取引所の正会員になりました。正会員になったというのは、当然ながら私、長堀という男を保証する人がいないとなれないわけですから、保証する人がいたというわけがあります。

その方はユダヤ人です。このユダヤ人の方はもうすでに亡くなりましたけれども、この方はこういう経験をしています。若い時経験した第一次世界大戦の時に、ポーランドで—ポーランドは寒い国でありますから—暖をとるということもできなかった。家族一同抱き合って何日もの夜を過ごした。その後、こういう状態では自分たちは危ないということで、南アフリカのヨハネスブルグに渡ってダイヤモンド鉱山との関係ができて成功して、そしてまた第二次世界大戦後にアントワープに戻ってくるわけですね。その方はゴルフが好きな方でありまして、戦後間もなくアントワープにあるゴルフ場に入会したいと申し込んだけれども断られた。やっぱりユダヤ人はダメだと、明らかな人種差別であります。そしてその方の娘の旦那さんの方のお母さんは、第二次世界大戦の時にアウシュビッツに連れられて殺されてしまった。そういう経験をしてきた人たちが沢山おります。その方々が—これは正に本校の校訓「至誠」の問題であると思っております—至誠を貫いている。そういうことはやっぱりユダヤ民族としては当然のことだと思います。アメリカ型ではありません。契約書なんかサインしません。それこそお友達、アミーゴの世界なんです。ちょっとかなり違うところがあります。そういうユダヤ人に私は保証人になっていただいて、「ミスター長堀、君は大丈夫だ。俺が保証する。」と、第一号の、日本人で最初のアントワープダイヤモンド取引所の正会員になったということでもあります。当時新聞にずいぶん出まして、いろんな取材を受けたという経験もさせていただきました。

それから次に私の経験から申し上げますと、インド人なんです。インド人は世界全体におりますけれども、今はアメリカでもヨーロッパでもアフリカもそうですが、大変大きな勢力をもっております。特にインドは、多民族国家です。インド人であっても、民族が200くらいあります。その中でジャイナ教という仏教に一番近い、仏教原理主義のような宗教を信じている方々がおられます。これは500万人くらいいるんじゃないでしょうか。このほとんどの方々が肉食主義者なんです。このジャイナ教の方々というのは我々のダイヤモンド産業をインドで支配しておりまして、今やこのユダヤ人のマーケットを抜くのではないかといいくらい発展しておりまして、インドのムンバイを中心としてダイヤモンド産業人口300万ぐらいに成長したということでもあります。

さらに華僑ですね。華僑と申しましてただ、単なる華僑全体と言っているわけではありまして、主に広州・福建人です。広州人というのは福建省のだいたい南ぐらいの方々です。この方々が華僑の主流であります。客家もそうです。「お客さんの家」と書いて客家の人々もそうですが、こういう方々は、ビジネス関係の中で決して人の信頼を裏切りません。人の信頼を裏切らない。人を裏切らない。むしろ日本人よりもこういう方々は誠を貫く、嘘はつかないというモラルをしっかりとっているといえます。そういう意味において私は最近、日本人のモラルについては大いに心配をしているというところでございます。・・・

・・・・・・・・・・ 後 略 ・・・・・・・・・・

(※1) 創立110周年記念行事 記念講演 2008(平成20)年9月27日(土) 14:30～ 相馬高校体育館。

(※2) 創立110周年記念誌『紅の旗』(2009(平成21)年1月発行)の記念講演記録より一部(全文の15%程度)のみ抜粋。

(※3) 昭和27(1952)年卒、福田出身。第9代馬城会長。馬城かわら版第127号に記載。 (抜粋・転記&※脚注 村山)